

短縮版対人ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検証

The reliability and validity of a short form of the Interpersonal Stress-Coping Inventory

加 藤 司

Tsukasa, KATO

学生相談室紀要 第7号

2002年3月

神戸女学院大学学生相談室

短縮版対人ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検証

The reliability and validity of a short form of the Interpersonal Stress-Coping Inventory

加藤 司

Tsukasa, KATO

ストレスフルなイベントの一つに、ストレスフルな対人関係上の出来事、すなわち、対人ストレスイベントがある (Bolger, DeLongis, Kessler, & Schilling, 1989; Kanner, Coyne, Schaefer, & Lazarus, 1981)。青年にとって、対人ストレスイベントとの遭遇は避けることのできない問題であり (Seiffge-Krenke & Shulman, 1993)、ストレスフルなイベントのなかでも比較的大きな割合を占めていることが知られている。例えば、原田・尾関・津田 (1992) は大学生を対象に「最もストレスを感じていること」を記述させたところ、人間関係に関するストレスを記述した被調査者は、全体の23.8%を占めていたと報告している。こうした対人ストレスイベントに対するコーピング、すなわち、対人ストレスコーピングの個人差を測定することは、個人の精神的健康状態を予測する上で重要なことである。

しかし、現在のところ、信頼性と妥当性が検証されている対人ストレスコーピング尺度は、加藤 (2000a) によって作成された Interpersonal Stress-Coping Inventory (以下、ISI) だけである。加藤 (2000a) の ISI は、大学生を対象に、自由記述法によって得られた117項目をもとに作成されたものであり、因子分析の結果、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3つの下位尺度を有することが明らかとなっている。ポジティブ関係コーピングは人間関係で生じたストレスフルなイベントに対して、積極的にその関係を改善し、よりよい関係を築こうと努力する因子である (例えば、相手のことを良く知ろうとした、積極的に話をするようにしたなど)。ネガティブ関係コーピング (10項目) はそうした関係を放棄・崩壊するような行動をとる因子である (例えば、無視するようにした、友達付き合いをしないようにしたなど)。解決先送りコーピング (8項目) はストレスフルなイベントを問題とせず、無視するような行動をとる因子で

ある (例えば、自然の成り行きに任せた、気にしないようにしたなど)。従来のコーピング尺度は因子構造が不安定なものが多かったが、ISIは項目の因子間の変動はみられず、繰り返し同一の3因子が抽出されている (例えば、加藤, 2000a, 2000b, 2001d, 2001e, 印刷中 a; 加藤・伊藤・石橋・小石, 印刷中)。また、ISIの内的整合性は $\alpha = .80 - .86$ (加藤, 1999a)、 $\alpha = .79 - .87$ (加藤, 2000a)、 $\alpha = .84 - .88$ (加藤, 2001d)、 $\alpha = .85 - .89$ (加藤, 2001e)、 $\alpha = .88 - .90$ (加藤, 印刷中 a)、 $\alpha = .80 - .89$ (加藤・伊藤・石橋・小石, 印刷中) と、安定した値が検出されている。信頼性に関しては、再検査法による検証がなされており、2週間後におけるISIの下位尺度の信頼性係数は、ポジティブ関係コーピングが $r = .89$ 、ネガティブ関係コーピングが $r = .92$ 、解決先送りコーピングが $r = .86$ であった (加藤, 2000a)。

現在までに、ISIを用いて、高校生 (加藤, 2001e)、大学生 (加藤, 1999a, 1999b, 2000a, 2000b, 2001a, 2001b, 2001c, 2001d, 印刷中 a; 加藤・今田, 2000b)、アルバイト学生 (加藤・伊藤・石橋・小石, 印刷中)、看護婦 (加藤・今田, 2000a) などを対象にした研究がなされており、対人ストレスコーピングが抑うつ (加藤, 2001a)、心理的ストレス反応 (加藤, 2001b, 2001d; 加藤・今田, 2000a, 2000b)、友人関係満足感 (加藤, 2001d)、職務満足感 (加藤・伊藤・石橋・小石, 印刷中)、Quality of Life (加藤, 1999b)、動機づけ (加藤・伊藤・石橋・小石, 印刷中) などに影響を及ぼすことが実証されている。例えば、加藤 (2001d) の研究では、対人ストレスコーピングがその後の精神的健康にどのような影響を及ぼすか検証した結果、ポジティブ関係コーピングは友人関係に関する満足感を高めること、ネガティブ関係コーピングは心理的ストレス反応を増加し、友人関係に関する満足感を低下させること、解決先送りコーピングは心理的ストレス反応を低下させ、友人関

係に関する満足感を高めることなどを明らかにしている。また、行動特性を含めたパーソナリティ(加藤, 1999a, 2001c, 2001d)、認知的評価(加藤, 2001b, 2001d)、ラザルス式ストレス・コーピング・インベントリー(加藤, 2000a)などとの関連性が検証されている。さらに、ISIは他の尺度の妥当性を検証するための基準尺度として使用されており(加藤, 2000b, 印刷中aなど)、ISIの妥当性は十分保証されているといえる。

一方、コーピングには多くの変数が関与している。例えば、加藤(2001d)の研究では、パーソナリティ→認知的評価→コーピング→精神的健康といった対人ストレス過程を仮定し、7尺度109項目におよぶ質問紙調査を実施している。このように、多くの質問項目を実施することは、被調査者の負担となり、研究の信頼性を低下させる可能性がある。また、教育、職場、医療場面での汎用を考えると、可能な限り項目数の少ない尺度の作成が望まれる。ISIは34項目から構成されており、他のコーピング尺度と比較して、項目数の多いコーピング尺度であるとはいえないが、研究・実践場面におけるさらなる汎用のために、短縮版を作成することは意義のあることだと思われる。実際、加藤(2001a)はISIの34項目から各因子5項目、計15項目を選出し、その因子構造と内的整合性を検証している。しかし、加藤(2001a)の研究では、短縮したISIの妥当性の検証がなされていない。そこで、本研究では、新たにISIの短縮版を作成し、その信頼性と妥当性を検証することを目的とする。

研究1

目的

研究1の目的は、ISIの短縮版を作成し、その因子パターン、および再検査法によって信頼性を検証することである。

方法

手続きと被調査者 1999年11月から2000年5月にわたり、専門学校生、短期大学生、大学生を対象に、講義時間中、質問紙による調査を実施した。有効回答者は285名(男性122名、女性163名、平均20.03歳、範囲18-25歳、標準偏差1.43)であった。また、再検査法による信頼性を検証するため、

調査の実施から4週間後、有効回答者のうち115名に対して再度、同一の質問紙による調査を実施した。有効回答者は101名(男性41名、女性60名、平均19.34歳、範囲18-24歳、標準偏差1.21)であった。

質問紙 ISIの短縮版を作成するために、まず、ISIの各下位尺度から5項目を選出した。項目の選出にあたっては、ISIのI-T相関(加藤, 1998)、因子負荷量(加藤, 2000a, 2001a)を参考にした。選出した5項目に対し、以下のような教示のもと、4件法によって評定させた。各項目の得点は3-0点とし、得点が高いほどコーピングの使用頻度が高いものとした。

教示: 今まで、人間関係で生じるストレスを経験したことがあると思います。人間関係で生じるストレスとは、例えば、「けんかをした」、「誤解された」、「何を話していいのか、わからなかった」、「自分のことを、どのように思っているのか気になった」、「自慢話や、愚痴を聞かされた」、「嫌いな人と話をした」などの経験によって、緊張したり、不快感を感じたりしたことを言います。あなたが、実際に経験した人間関係で生じたストレスに対して、普段、どのように考えたり、行動したりしましたか。以下の項目に対して、“よくあてはまる”、“あてはまる”、“少しあてはまる”、“あてはまらない”から選択し、○をつけてください。

なお、教示文における対人ストレスイベントの例は、橋本(1997)の対人ストレスイベント尺度を参考に、3つの下位尺度それぞれから2項目を選択し作成したものである。

結果と考察

因子パターンの検証 因子分析に先立ち、反応率の偏向の分析、G-P分析による項目分析を行った。反応率の偏向に関する検証の結果、有効回答者の85%以上の被調査者が使用した項目、および、使用しなかった項目は確認されなかった。得点の平均値を利用したG-P分析の結果、すべての項目において、上位群が下位群より平均値が有意に高かった($p < .05$)。

次に、ISIの短縮版の因子パターンを検証するために、因子分析(反復主因子法、promax回転)を行った。その結果、固有値1.0以上の3の因子

を抽出することができた（第3因子の固有値は0.86）。そこで、3因子構造を仮定し、再度、因子分析（SMCによる反復主因子法、promax回転）を行った結果がTable 1である。第一因子に高い負荷を示した5項目は、すべて原版ISIのネガティブ関係コーピングの項目から選出されたものであり、第一因子は原版ISIのネガティブ関係コーピングに対応していた。第二因子に高い負荷を示した5項目は、すべて原版ISIの解決先送りコーピングの項目から選出されたものであり、第二因子は原版ISIの解決先送りコーピングに対応していた。第三因子に高い負荷を示した5項目は、すべて原版ISIのポジティブ関係コーピングの項目から選出されたものであり、第三因子は原版ISIのポジティブ関係コーピングに対応していた。この15項目をもって、短縮版対人ストレスコーピング尺度（ISI-15）とする。なお、累積寄与率は61.92%、内的整合性（ α ）は.80-.87であった。

再検査法による信頼性の検証 4週間後における

Table 1 短縮版対人ストレスコーピング尺度（ISI-15）の因子パターン

	F1	F2	F3	共通性
F1: ネガティブ関係コーピング				
話をしないようにした	.833	.001	-.038	.707
かかわり合わないようにした	.814	.047	.046	.664
友達付き合いをしないようにした	.806	.013	-.010	.655
無視するようにした	.763	.091	-.026	.615
人を避けた	.580	-.157	.075	.328
F2: 解決先送りコーピング				
そのことにこだわらないようにした	-.061	.931	.013	.857
気にしないようにした	.023	.841	.120	.732
何とかかなと思った	-.140	.673	.062	.457
こんなものだと割り切った	.088	.614	-.140	.418
あまり考えないようにした	.108	.573	-.099	.366
F3: ポジティブ関係コーピング				
人間として成長したと思った	.086	.000	.772	.581
この経験で何かを学んだと思った	.157	-.056	.664	.429
相手の気持ちになって考えてみた	.018	.002	.645	.412
相手のことを良く知ろうとした	-.096	.017	.633	.431
積極的に話をするようにした	-.162	.020	.516	.321
因子寄与	3.769	3.041	2.478	
信頼性 (%)	.870	.842	.797	
因子間相関				
F1		-.116	.003	
F2			.122	

るISI-15の信頼性係数は、ポジティブ関係コーピングが $r=.84$ 、ネガティブ関係コーピングが $r=.88$ 、解決先送りコーピングが $r=.78$ であった。現在、信頼性と妥当性が十分検討されている代表的コーピング尺度であるCOPE ($r=.46-.86$, Carver, Scheier & Weintraub, 1989)、CISS ($r=.51-.73$, Endler & Parker, 1994)と比較しても、十分な値であった。

使用頻度の検証 ISI-15における対人ストレスコーピングの使用状況を検証するために、ISI-15の下位尺度の平均値と標準偏差をTable 2に示した。次に、ISI-15の下位尺度の得点を条件とした被験者内計画による分散分析を行った。その結果、条件の効果が有意であった ($F(2, 568)=61.90, p<.001$)。そこで、Bonferroniによる多重比較を行った結果、各条件間にも有意な差が確認された ($p<.001$)。すなわち、ISI-15の下位尺度の大小関係はネガティブ関係コーピング<ポジティブ関係コーピング<解決先送りコーピングとなった。

Table 2 ISI-15の平均値、標準偏差

	平均値	標準偏差
ポジティブ関係コーピング	5.587	3.563
ネガティブ関係コーピング	3.163	3.618
解決先送りコーピング	7.301	3.944

研究2

目的

研究2ではISI-Rの妥当性を検証するために、原版のISI、および精神的健康との関連性を検証する。加藤(2001d)によれば、コーピングが精神的健康に及ぼす影響を検証する際には、ポジティブな精神的健康とネガティブな精神的健康の両側面からの検証が必要であると指摘している。そこで、本研究では、ポジティブな精神的健康の指標として友人関係に関する主観的満足感、ネガティブな精神的健康の指標として孤独感、心理的ストレス反応を測定する。これまでの研究から、ポジティブ関係コーピングは友人関係に関する満足感を増加させること(加藤, 2001d)、ネガティブ関係コーピングは心理的ストレス反応を増加し(加藤, 2001b, 2001d; 加藤・今田, 2000a, 2000b)、友人関係に関する満足感を減少させること(加藤, 2001d)、解決先送りコーピングは心理的ストレ

ス反応を低下させ（加藤, 2001b, 2001d; 加藤・今田, 2000b）、友人関係に関する満足感を増加させること（加藤, 2001d）などが実証されている。これらのことから、ネガティブ関係コーピングはポジティブな精神的健康とは負の関連性、ネガティブな精神的健康とは正の関連性、解決先送りコーピングはポジティブな精神的健康とは正の関連性、ネガティブな精神的健康とは負の関連性が確認されると予測される。

方法

手続きと被調査者 2000年5月から11月にわたり、短期大学生、大学生を対象に、講義時間中、質問紙による調査を実施した。調査は4週間の間隔を空け、同一の被調査者に対して2度実施された。第1回目の調査では質問紙A、その4週間後に実施された第2回目の調査では質問紙Bを用いた。有効回答者は493名（男性188名、女性305名、平均18.69歳、範囲18-25歳、標準偏差1.09）であった。

質問紙 以下のような5つの質問紙を用いた。質問紙Aは①、②によって構成されていた。ただし、①と②の質問内容は類似しているため、①と②の間に、ダミー項目として60項目が加えられた。質問紙Bは③から⑤によって構成されていた。すべての項目は、“よくあてはまる”、“あてはまる”、“少しあてはまる”、“あてはまらない”の4件法によって評定され、各項目の得点は3-0点とした。

①短縮版対人ストレスコーピング尺度：研究1で作成したISI-15を用いた。質問形式は研究1と同一のものであった。

②対人ストレスコーピング尺度：加藤（2000a）のISIを用いた。ただし、質問形式はISI-15と同一のものであった。

③ストレス反応尺度：尾関（1993）の改訂大学生用ストレス自己評価尺度のうち、ストレス反応尺度を用いた。同尺度は抑うつ、不安、怒りの3つの下位尺度からなる情動反応15項目、情動的混乱、引きこもりの2つの下位尺度からなる認知・行動的反応10項目、自律神経系の活動亢進、身体的疲労感の2つの下位尺度からなる身体的反応10項目によって構成されている（尾関, 1993）。

④孤独感尺度：工藤・西川（1983）によって邦訳

されたRusell, Peplau, & Cutrona（1980）の改訂UCLA孤独感尺度を使用した。同尺度は20項目からなり、妥当性と信頼性が確認されている（工藤・西川, 1983）。

⑤友人関係に関する主観的満足感尺度：加藤（2001d）によって作成された友人関係満足感尺度6項目を用いた。同尺度は、我が国の青年を対象に作成された対人関係に関する尺度を参考に作成されたものであり、友人関係に関する主観的満足感を測定するものである。加藤（2001d）によって、その因子構造や、信頼性が検証されている。

結果と考察

原版ISIとの関連性の検討 まず、ISI-15の併存的妥当性を検証するために、ISI-15と原版ISIとの相関係数をTable 3に示した。ISI-15と原版ISIにおける、同一の下位尺度間相関は $r = .92 - .96$ であった。変数間の相関はいずれの下位尺度においても高く、ISI-15の併存的妥当性が保証されたといえる。

Table 3 原版ISIとISI-15との相関

原版ISI	ISI-15		
	ポジティブ関係コーピング	ネガティブ関係コーピング	解決先送りコーピング
ポジティブ関係コーピング	.936***	-.082	.024
ネガティブ関係コーピング	-.048	.922***	.166**
解決先送りコーピング	.018	.204***	.958***

** $p < .01$ *** $p < .001$

精神的健康との関連性の検討 次に、ISI-15の予測的妥当性を検証するために、ISI-15を説明変数、ストレス反応、孤独感、友人関係満足感などの精神的健康を基準変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 4）。その結果、精神的健康に関するすべての指標で重相関係数が有意であった。すなわち、ISI-15はストレス反応、孤独感、友人関係満足感を予測することができることが実証された。各精神的健康の指標に関しては、以下のような結果が得られた。まず、ストレス反応に関しては、ネガティブ関係コーピングから有意な正の影響（ $\beta = .24, p < .001$ ）、解決先送りコーピングからは有意な負の影響（ $\beta = -.17, p < .01$ ）を確認することができた。すなわち、ネ

Table 4 ISI-15を説明変数、精神的健康を基準変数とした重回帰分析

説明変数	基準変数		
	ストレス反応	孤独感	友人関係満足感
ポジティブ関係コーピング	.057	-.110*	.233***
ネガティブ関係コーピング	.242***	.198***	-.149**
解決先送りコーピング	-.170**	-.188***	.199***
重相関係数	.265***	.289***	.343***
決定係数	.070	.084	.118

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ガティブ関係コーピングを使用するほど、その後のストレス反応が増加し、解決先送りコーピングを使用するほど、その後のストレス反応が低下することが明らかとなった。これらの結果は、加藤(2001b, 2001d)、加藤・今田(2000a, 2000b)の結果と一致しており、予測したとおりの結果が得られた。次に、孤独感に関しては、ポジティブ関係コーピング($\beta = -.11, p < .05$)、解決先送りコーピング($\beta = -.19, p < .001$)から有意な負の影響、ネガティブ関係コーピング($\beta = .20, p < .001$)からは有意な正の影響が確認された。すなわち、ポジティブ関係コーピング、解決先送りコーピングを使用するほど、その後の孤独感が減少し、ネガティブ関係コーピングを使用するほど、その後の孤独感が増加することが明らかとなった。これらの結果は予測と一致するものであった、ポジティブ関係コーピングに関する結果は、予測していないことであった。次に、友人関係満足感に関しては、ポジティブ関係コーピング($\beta = .23, p < .001$)、解決先送りコーピング($\beta = .20, p < .001$)から有意な正の影響、ネガティブ関係コーピング($\beta = -.15, p < .01$)からは有意な負の影響が確認された。すなわち、ポジティブ関係コーピング、解決先送りコーピングを使用するほど、その後の友人関係に関する満足感が増加し、ネガティブ関係コーピングを使用するほど、その後の友人関係に関する満足感が減少することが明らかとなった。これらの結果は、加藤(2001d)の結果と一致しており、予測したとおりの結果が得られた。以上のことから、ISI-15の予測的概念妥当性は保証されたと考えられる。

総合的考察

本研究の目的は、ISIの短縮版であるISI-15を作成し、その信頼性と妥当性を検証することであった。そのため、2つの研究が実施された。研究1ではISI-15の因子構造と信頼性の検証が行われた。ISI-15の因子構造は原版のISIと同様3因子構造であり、その内的妥当性は $\alpha = .80-.87$ であり、十分な値であった。また、4週間の間隔をあけた再検査法による信頼性を検証したところ、信頼性係数は $r = .78-.84$ であった。研究2ではISI-15の妥当性を検証するために、原版のISI、ポジティブな精神的健康(友人関係に関する満足感)、ネガティブな精神的健康(心理的ストレス反応、孤独感)との関連性を検証した。ISI-15の下位尺度は原版のISIに該当する下位尺度と高い相関を示した($r = .92-.96$)。精神的健康との関連性では、先行研究と一致した結果が得られ、ISI-15の妥当性が保証された。

しかし、ISI-15と孤独感との関連性に関して、予測していなかった結果が得られた。すなわち、ポジティブ関係コーピングがその後の孤独感に対して負の影響を及ぼしていたことである。これまで、ポジティブ関係コーピングは友人関係に関する満足感などポジティブな精神的健康とに有意な正の関連性が確認されているが(加藤, 2001d)、ネガティブな精神的健康とに有意な関連性が確認されていなかった(加藤, 2001b, 2001d; 加藤・今田, 2000a, 2000b)。そのため、孤独感に関してもポジティブ関係コーピングと有意な関連性はみられないと予測していた。一方、ある種のポジティブ関係コーピングはネガティブな精神的健康を低減させる効果があることが実証されている(加藤, 印刷中a)。例えば、他者に対して共感的なコーピング方略はポジティブ関係コーピングに包括されるが、この共感的なコーピング方略は個人の心理的ストレス反応を低減させる効果をもつことが実証されている(加藤, 印刷中a)。また、加藤(印刷中b)によれば、対人ストレスコーピングは他者に影響を及ぼし、その相互作用によって対人関係が変化し、その結果として、個人の精神的健康に変化が生じるというモデルが提唱されている。このモデルによれば、ポジティブ関係コーピングは他者に対して好感を抱かせるコーピングであり、

その結果、良好な対人関係が成立する。良好な対人関係は孤独感を防ぎ、精神的に健康な状態となると仮定されている。これらは、本研究におけるポジティブ関係コーピングと孤独感に関する結果と一致しているが、これまでのポジティブ関係コーピングとネガティブな精神的健康との関連性に関する研究結果とは一致していない。今後、さらに、ポジティブ関係コーピングとネガティブな精神的健康との関連性を検証する必要がある。

引用文献

- Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R.C., & Schilling, E.A. 1989 Effects of daily stress on negative mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 808-818.
- Carver, C.S., Scheier, M.F., & Weintraub, J.K. 1989 Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 267-283.
- Endler, N.S., & Parker, J.D.A. 1994 Assessment of multidimensional coping: Task, emotion, and avoidance strategies. *Psychological Assessment*, 6, 50-60.
- 橋本 剛 (1997) 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, 13, 64-75.
- 原田雅浩・尾関友佳子・津田 彰 1992 大学生の心理的ストレス過程——ストレスラーに対する認知的評価とコーピングおよびストレス反応——九州大学教養部心理学研究報告, 10, 1-16.
- Kanner, A.D., Coyne, J.C., Schaefer, C., & Lazarus, R.S. 1981 Comparison of two modes of stress measurement: Daily hassles and uplifts versus major life events. *Journal of Behavioral Medicine*, 4, 1-39.
- 加藤 司 1998 心理的ストレス過程における対人ストレスコーピング 神戸大学総合人間科学研究科修士論文
- 加藤 司 1999a 対人ストレスコーピングと対人行動特性 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 443.
- 加藤 司 1999b 対人ストレス過程の検討(1) 日本心理学会第63回大会発表論文集, 754.
- 加藤 司 2000a 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234.
- 加藤 司 2000b 失恋ストレスコーピング尺度の作成 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 296-297.
- 加藤 司 2001a コーピングの柔軟性と抑うつ傾向との関係 心理学研究, 72, 57-63.
- 加藤 司 2001b 対人ストレス過程における帰属とコーピング 性格心理学研究, 9, 148-149.
- 加藤 司 2001c 対人ストレスコーピングと Big Five との関連性について 性格心理学研究, 9, 140-141.
- 加藤 司 2001d 対人ストレス過程の検証 教育心理学研究, 49, 295-304.
- 加藤 司 2001e 高校生における対人ストレスコーピング 日本教育心理学会第43回総会発表論文集,
- 加藤 司 印刷中 a 共感的コーピング尺度の作成とその精神的健康への影響について 社会心理学研究, 17,
- 加藤 司 印刷中 b 対人ストレス過程における社会的相互作用の役割 実験社会心理学研究
- 加藤 司・今田 寛 2000a 看護職者のストレス反応に及ぼすコーピングの影響 日本健康心理学会第13回大会発表論文集, 204-205.
- 加藤 司・今田 寛 2000b 対人ストレスコーピングのストレス低減効果について 日本心理学会第64回大会発表論文集, 872
- 加藤 司・伊藤崇達・石橋寛子・小石寛文 印刷中 対人ストレスコーピングと職務満足感が自己決定理論に基づく動機づけタイプにおよぼす影響——アルバイト学生を対象に—— 人間科学(神戸大学)
- 工藤 力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(I)——孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—— 実験社会心理学研究, 22, 99-108.
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂——トランスアクションナルな分析に向けて——久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- Russell, D., Peplau, L.A., & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA loneliness scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 472-480.
- Seiffge-Krenke, I. & Shulman, S. 1993 Stress, coping and relationships in adolescence. In S. Jackson & H. Rodriguez-Tome (Eds.), *Adolescence and its social worlds*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 169-196.